慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	エンゲルスの「窮乏化」論
Sub Title	On Engels's model of impoverishment
Author	寺出, 道雄
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1991
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.84, No.3 (1991. 10) ,p.629(97)- 638(106)
JaLC DOI	10.14991/001.19911001-0097
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19911001-0097

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」84巻3号（1991年10月）

研究ノート

エンゲルスの「窮乏化」論

寺出道雄

<目次>

㈠ はじめに
㈡ エンゲルスの展開
㈢ 説明
㈣ おわりに

㈠ はじめに

1845年，当時25歳のエンゲルスは，『イギリスにおける労働者階級の状態』を出版した。これは，エンゲルスが，1842年から44年まで，父の経営するマンチェスターの工場の手助けのため，ドイツを離れイギリスに滞在した際，産業革命直後のイギリスの労働者階級の状態をつぶさに観察したことにもとづくものであった。『状態』の中でエンゲルスは，当時のイギリスの労働者の貧窮を，ブルジョワジーが仕かけた「隠された戦争」(1)（disguised war）の結果として，詳細に描写したのである。

もちろん，『状態』は，体系的理論の提供よりは，現状の記述に力点をおいたものであった。しかし，そこでのエンゲルスの展開は，産業革命期とその直後の労働者階級の窮乏化について——後にマルクスが『資本論』で，資本制下の一般論としてより“昇化”させて論じた窮乏化論よりも——具体的な議論の基礎を提供しているように思われる。

本稿の目的は，そうしたエンゲルスの展開がどのようなものであったかを要約的に整理し，ついでそれにいささかは整合的な説明の枠組みを与えることである。

㈡ エンゲルスの展開

ここで，『状態』におけるエンゲルスの展開を命題化して整理してみよう。

1. 都市の労働者の賃金と生活水準は多様な階層性を示す。

「大都市の労働者階級はわれわれにさまざまな生活状態の段階を示す。もっともめぐまれた場合には一時的にまずまずの生活が送れ，過重な労働のかわりによい賃金，よい住居，けっして悪くはない食物をえる。もちろんすべて労働者の立場から見て良好なのであり，まずまずなのである。最悪の場合には赤貧におちいり，ついには浮浪者となり，餓死することもある(2)」。

「労働者一人一人の日常の食事そのものは，当然ながら労賃によって異なる。比較的賃金の高い労働者は，……毎日肉を欠かさず，夕食にはベーコンとチーズを食べる。稼ぎが彼らよりも少ない場合には，日曜日しか，あるいは週に二ないし三回しか肉を食べず，そのかわりにジャガイモやパンをより多く食べる。より下層の

注（1） Engels, [2] p. 121, 上. p. 174.
以下，『状態』の引用は，英語版と邦語版の頁数を示す。
（2） ibid., p. 108, 上. p. 151.

労働者へ進むにつれて，動物性食物はジャガイモのなかにきざみこまれたわずかなベーコンだけとなる。さらに下層になるとこれもなくなって，チーズと，パンと，オートミールと，ジャガイモだけとなり，最下層のアイルランド人まで来ると，食物はジャガイモだけとなる[3]」。

「しかしこれらすべては，労働者が雇用されているのを前提としての話である。仕事がないと労働者はまったく運命に身をまかせ，もらい物や乞食をして手にいれたもの，さもなければ盗んだ物を食べる。そしてなにも手に入らないと，……まさに餓死するのである[4]」。

2. その中で，工業労働者，とりわけ機械制の工場労働者の賃金は，彼らに工場労働に必要な文明度・適応度を確保しうるような水準で決定される。

「蒸気力や機械の導入（によって）……労働者の仕事は容易になり，筋肉の酷使は省かれ，労働そのものは軽いが，しかし極度に単調なものとなる。労働は彼らに精神活動の余地をまったくあたえないが，それぞれその労働をきちんとおこなうためには，ほかのことを考えていられないほどの注意ぶかさを要求する[5]」。

こうして「たいていの工業労働はある一定の熟練と規則性を必要とする。したがって一定の文明度をも必要とするこの種の労働にたいしては，平均賃金もこうした熟練を習得し，労働の規則性にしたがうように労働者をうながすものでなければならない。だから工業労働者の賃金は，平均してただの荷物運搬人や日雇い労働者等の賃金よりも高い……[6]」。

「ある労働は一定の文明度を必要とする。そしてほとんどすべての工業労働はこのなかにふくまれる。だからブルジョワジー自身のためにも，ここでの賃金は労働者がこの範囲でやっていけるぐらいに高くなければならない[7]」。

3. しかし，都市には「過剰人口」が滞積し，彼らは，さまざまのインフォーマル・セクターでの就業によって生活している。

「（労働の失業）予備軍は恐慌のあいだは巨大な数にのぼり，繁栄と恐慌との中間と見なすことのできる時期でもかなりの数に達する。これこそ，イングランドの『過剰人口』なのである。彼らは乞食や盗みをしたり，道路清掃や馬糞拾いや，手押し車かロバでの荷物運びや，あちこちでの露店業や，ときたまの片々たる仕事をしたりして，なんとか露命をつないでいる。どの大都市にも，このようにときたまのわずかばかりの稼ぎによって，イングランド人のいう『やっと生きていく』ような人びとが多数見うけられる[8]」。

4. 一方，農業労働者の賃金は，農村における家父長的関係の解体のために低下した。

「農業プロレタリアートの形成当初は，同じころ工業では破壊されていた家父長的関係……が発達していた。この関係が存在しているかぎり，窮乏は労働者のあいだにわずかしか，またはまれにしかあらわれなかった。作男は借地農と運命をともにし，最悪の場合にしか解雇されなかった。しかし現在はちがう。人びとはほぼ全員が日雇い労働者である。彼らは借地農が必要とするときに雇われるのであり，したがってまたしばしば何週間も仕事がないことがある……。家父長的関係のもとでは，作男とその家族は借地農の農場内に住み，子供もそこで育った

注（3） ibid., p. 108, 上. p. 148.
（4） ibid., p. 108, 上. pp. 148-149.
（5） ibid., p. 152, 上. p. 231.
（6） ibid., p. 113, 上. p. 160.
（7） ibid., p. 111, 上. p. 156.
（8） ibid., p. 119, 下. p. 169.

ので，当然ながら借地農は成長した子供世代をも雇おうと努めたし，また日雇い労働者は例外であって通例ではなかったから，どの農場にも厳密にいって必要であるよりも多くの労働者がいた。だからこのような家父長的関係を解体し，作男を農場から追い出し，彼らを日雇い労働者にかえることは，借地農の利益でもあったのである。こうしたことは今世紀（19世紀）の二十年代のおわりごろにはかなり一般的におこり，その結果，現在では，物理学の表現をもちいるならば，潜在的（latent）であった過剰人口は解放され，賃金は抑制され……たのである[9]」。

「このころから，工業地方が変動的貧窮の中心地となったように，農業地方は永続的貧窮の中心地となった[10]」。

この場合，「農業がその安定性をたもっていた期間が長ければ長いほど，負担はますます重く労働者にのしかかり，旧来の社会諸関係の解体は農業地方でますます暴力的にあらわれたのである。『過剰人口』は突然あらわれたが，工業地帯でのように，生産の増大によってそれを除去することはできなかった。生産物の買い手がいれば新しい工場を建てることはいつでもできたが，新しい土地をつくりだすことはできなかった。……その必然的な結果として，労働者間の競争は頂点に達し，賃金は最低限に落ちこんだ[11]」。

5. 農業労働者の貧窮は共有地の消失によっても促進された。

「共有地はつぎつぎにとりあげられ，たがやされる。それによってたしかに耕作は増進するが，プロレタリアートは大損害をこうむる。共有地があれば，貧民はそこで一頭のロバや一匹のブタ，または数羽のガチョウを飼うことができたし，子供や若者には，遊んだり戸外でさまよい歩いたりすることのできる場所があった。こうしたことがますますできなくなると，貧民の稼ぎは少なくなり，また遊び場を奪われてしまった若者は，そのかわりに居酒屋にかようようになる[12]」。

6. 都市における労働需要の増大には，都市の過剰人口とともに，農村からの労働力移動によって対応がなされる。

「イングランドの工業は短期間の繁栄の絶頂期を除外して，まさにもっとも活気ある数カ月間に，市場で求められる大量の商品を生産することができるように，労働者の失業予備軍をもっていなければならない……。この予備軍は，市況がその一部をより少なく雇用するかより多く雇用するかに応じて，多くもなれば少なくもなる。市場がもっとも繁栄した状態のときには，少なくとも一時的には，農業地方やアイルランドや，あまり好況に巻きこまれていない労働部門がなにほどかの労働者を供給することができるにしても，これらの労働者は一方ではやはり少数にすぎないし，他方では同様に予備軍に属しているのである。ちがいといえば，好況のたびにはじめて，予備軍に属しているのだとわかることぐらいである[13]」。（エンゲルスは，ここでは，農村から都市への労働力移動の量的な意味をあまり重くみていない。しかし，以下では，それをきわめて重視している）。

7. アイルランドからの労働力移動は，都市における下層労働者の供給源となっている。

「もしイングランドがアイルランドの多数の貧しい人口を意のままにつかえる予備軍としてもっていなかったとすれば，イングランドの工

注（9） ibid., pp. 296-297, 下. pp. 184-185.
（10） ibid., p. 297, 下. p. 185.
（11） ibid., pp. 297-298, 下. p. 186.
（12） ibid., pp. 317-318, 下. p. 225.
（13） ibid., p. 119, 上. p. 168.

業の急速な伸長はおこりえなかったであろう。アイルランド人は故郷ではなにも失うものがないが，イングランドでは手に入るものがたくさんある。そしてセント・ジョージ海峡の東側では，腕力のある者は安定した仕事とよい賃金をみつけられることがアイルランドで知られたときから，毎年アイルランド人の群が海峡をわたってきた。……これらの移住者のほとんどすべてが工業地帯へ，つまり大都市へ身を投じ，そこで人口の最下層階級を形成している[14]」。

8. 都市の下層労働者の賃金は，アイルランド農民の所得と均衡化しつつある。

「イングランド労働者の下層大衆の状態は，すべて市場で彼らの競争相手となっているアイルランド人の状態にますます近づいていること，たいした熟練もなしに体力だけで片づけられる仕事はすべて，イングランドの賃金ではなく，アイルランドのそれに近い賃金で，すなわち，『年三十週は粗悪きわまるジャガイモで腹八分になる』よりはいくらかましな賃金——いくらかましな賃金とはいっても，アイルランドから汽船が到着するごとに，この最終目標に近づいていくのだが——でおこなわれていること，こうしたことを知らない者が，はたしているであろうか？[15]」

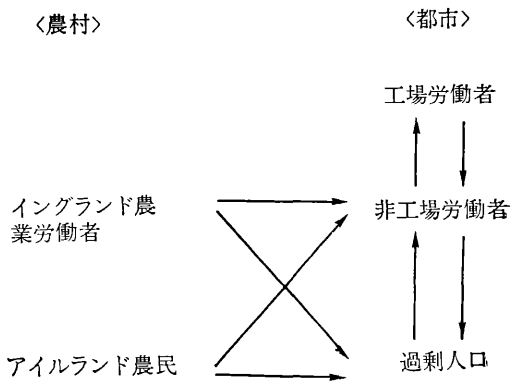
以上のようなエンゲルスの把握は，右上の図のように図解することができるだろう。

その展開は，

1) 都市の労働力の所得と生活水準が，工場労働者から，「過剰人口」まで，幅広い階層性を示すこと，(1, 2, 3),

2) 農村の労働力の生活水準は，そこにおける雇用の家父長的原理と共同体的関係の消失によって低下したこと，(4, 5),

3) 都市においては，労働力需要の増減に応じて「過剰人口」の吸引と反発がなされること，



エンゲルスの把握の図解

(6),

4) また，農村の労働力は，都市で期待できる生活水準が農村のそれを上回るとき，都市へ移動し，その両者は均衡化すること，(7, 8),

に着目するものであった。

(三) 説　明

(1)

さて，以下では，以上のようなエンゲルスの展開を説明していこう。

なお，以下では，資本蓄積の水準を一定とし，また，都市と農村の構造を，それぞれエンゲルスの展開よりも単純化して想定しておこう。すなわち，都市においては，そこでの雇用・所得の階層性を捨象し，雇用機会としては機械制の工場での雇用のみが存在するとしよう。また，農村においては，植民地であるアイルランドと他の地域の農村における生産関係や所得の差を捨象し，資本家的借地農業のおこなわれる農村として一括して考えておこう。そうした単純化によっても，エンゲルスの産業革命における労働者の窮乏化に関する展開の基本は理解可能だからである。(それらの点については，後に簡単にふれることにしよう。)

以上のような単純化を前提に，次のような体

注 (14) ibid., p. 124, 上. p. 179.
(15) ibid., p. 125, 上. p. 181. T. Carlyle の *Chartism* からの引用。

系を，既知の議論にもとづき考えよう。

① $Y_f=f(N_f,\ \bar{K}_f)$ ；$f'>0,\ f''<0$

② $w_f=w_f^*$ ；$U(w_f^*)>U(w_a)+C$

③ $N_f=f'^{-1}(w_f)$

④ $Y_a=g(N_a,\ \bar{K}_a,\ \bar{L}_a)$ ；$g'>0,\ g''<0$

⑤ $w_a=Pg'(\gamma N_a)$ ；γ は $1>\gamma>0$ の定数

⑥ $P=\phi\left(\dfrac{Y_f}{Y_a}\right)$ ；$\phi'>0$

⑦ $N_u+N_a=\bar{N}_c+\bar{N}_r=\bar{N}$ ；$N_a\leqq\bar{N}_r$

⑧ $U_u=\dfrac{N_fU_f}{N_u}$

⑨ $U_f=U(w_f)-\Delta$ ；$U'>0$，Δ は $\Delta>0$ の定数

⑩ $U_a=U(w_a)+C-\Delta$；C は $C>0$ の定数

⑪ $U_a=U_u$

ここで，①は工場部門の生産関数を示している。すなわち，一定量の資本（$\bar{K}_f$）のもとで，産出量（Y_f）は，雇用労働量（N_f）の関数となるのである。ここでは，1人の労働者が1期に支出する労働量は社会的に標準化されるものとし，それを1単位と考えて，N_f は労働者数を計るものとしておこう。

②は，工場の賃金率（w_f）を示している。それは，後に見る労働者を工場労働者として十分に文明的なものとする水準（w_f^*）で決定されるのである。ここでは，w_f^* は，

$$U(w_f^*)>U(w_a)+C$$

を満たすため，実現可能であるとする。

③は，工場の雇用労働者数を示している。それは，②で示される賃金率を所与として，利潤最大化原理に従って決定されるのである。

④は，農業部門の生産関数を示している。すなわち，一定量の資本（$\bar{K}_a$）と土地（$\bar{L}_a$）の存在のもとで，産出量（Y_a）は，雇用労働量（N_a）の関数となるのである。ここでも，1人の労働者が1期に支出する労働量は社会的に標準化されるものとし，それを1単位と考えておこう。

⑤は，農業部門の賃金率（w_a）を示している。それは，工業製品のタームで計った農業製品の価格（P）に，農業製品のタームで計った賃金率を乗じたものに等しい。後者は，後に見る家父長的原理にもとづいて決定されるのである。

⑥は，価格の決定を示している。すなわち，工業製品のタームで計った農業製品の価格は，工業製品と農業製品の産出量の比の関数となるのである。(16)

⑦は，総労働力人口（$\bar{N}$）を示している。都市労働力人口（N_u）と農業労働者数の和は，都市労働力人口の賦存量（$\bar{N}_c$）と農村労働力人口の賦存量（$\bar{N}_r$）の和に等しく，それはさらに総労働力人口の賦存量に等しいのである。ここで，

$$N_a\leqq\bar{N}_r$$

の制約は，後に見るように，家父長的雇用原理の存在のもとでは，都市から農村への労働力移動は不可能であることを示している。

⑧は，都市における労働者の期待効用（U_u）を示している。それは，工場労働者の得られる効用（U_f）に，都市労働力人口が工場で雇用される確率を乗じたものに等しい。

⑨は，工場労働者の効用水準を示している。それは，賃金によって得られる効用と，労働の不効用（$-\Delta$）の和である。なお，ここでは，加法的な効用関数を想定するのである。

⑩は，農業労働者の効用水準（U_a）を示している。それは，賃金によって得られる効用と，共有地や共同体的関係そのものの残存から得られる——生活上の相互扶助等による——効用（C）と，単純化のため工場のそれと等しいとした労働の不効用の和である。(17)

⑪は，この体系の均衡条件である。すなわち，労働力は都市における期待効用と農業労働者の

注（16） こうした価格決定式が妥当するための十分条件は，「各個人が同一のホモセティックな選好マップをもつこと」（Harris and Todaro, [3] p. 128）である。なお，この体系全体につき同論文参照。

（17） 簡単化のため，共有地での生産物が市場にだされたり，市場価格で評価される関係は捨象しておこう。また，後に共有地の消失を問題にするときも，その私的耕作がおこなわれる点は捨象しておこう。

効用が等しくなるように移動し，農村と都市の労働力移動量は，都市における期待効用と農業労働者の効用の差の関数，

$$\dot{N}_u=\phi(U_u-U_a) \qquad ;\ \phi(0)=0,\ \phi'>0$$

$$\dot{N}_u\equiv\frac{dN_u}{dt}$$

となるのである。したがって，⑪が満たされるとき，体系は均衡するのである。

（2）

ここで，以上のような体系の含意は次のようなものである。

産業革命以前の工業労働者は，正常な右上りの労働供給曲線を保持していた。[18] 他方，工業資本家が利潤最大化原理に従い，その労働需要曲線が労働の限界生産力曲線に等しいとすると，図1で，雇用労働者数と賃金率はD'_uとS'_uの交点で，それぞれh，iで決定される。

しかし，機械制の工場制度が導入されるなら事態は変化しうる。工場制度に適応的な質の労働力を確保するための賃金率が決定されてくるからである。

ここで，工場部門の労働の限界生産力曲線に等しい労働需要曲線は，本来，図1の破線部を含んだD'_fで示されるものとしよう。

他方，労働者の工場労働者としての適応度が何らかの形で計りうるものとして，工場労働者として最低必要な適応度であるe^*と賃金率の関係が，図2で$O-w_f^*-j-k$で示されるようなものになるとしよう。[19] そのようなもとでは，②の制約条件が成立するもとでは，工業賃金率はw_f^*で決定され，労働需要曲線はD'_f上のw_f^*のところで垂直になる。そこでは，雇用労働量はN_f^*で決定されることになるのである。

以上のもとでは，従来の雇用労働量を基準としても，図1で，

$$h-N_f^*$$

の失業が生まれることになる。このとき，失業者は，もはや，労働の最低供給価格をもたないようになるとしよう。

また，ここで，工場労働者が毎期，前期に雇用されていたか否かにかかわりなく，都市労働力人口の中から無作為に選択されるとすると，都市労働力の期待効用は，⑨の効用関数を前提として，さしあたり，

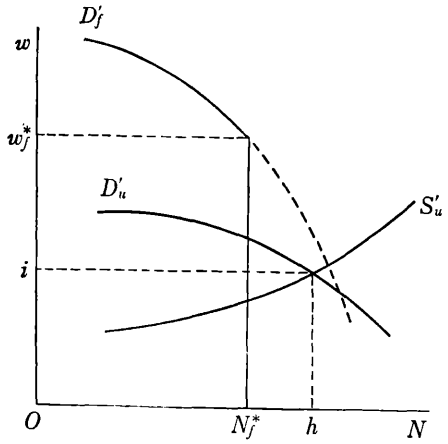


図 1

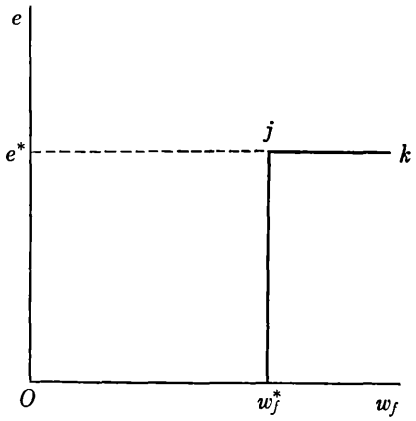


図 2

注（18）「彼ら（産業革命前の工業労働者）は過重労働の必要がなかったし，気が向かなければ働かなかった」。（Engels,〔2〕p. 36, 上. p. 28）

（19）ここでeの曲線がなめらかでS字型なら，「効率賃金仮説」に近いものになる。Basu,〔1〕第8章，Mirrlees,〔5〕参照。

$$U_a=\frac{N_f^* U_f^*}{h}$$

となる。

以上のような状況が，この体系の都市における前提である。

他方，農村の労働の限界生産力曲線は，図3の M'_p のようなものであるとしよう。ところが，農村において資本家的借地農業者が形成され，賃労働の雇用関係が生まれても，そこに家父長的関係が残存するなら，資本家は雇用において利潤最大化原理に必ずしも全面的に従わないであろう。そこでは，利潤最大化を基準として過大な労働者が雇用されることになるのであり，資本家の労働需要曲線は，図3の D'_a のように，M'_p の右に位置したものになる。

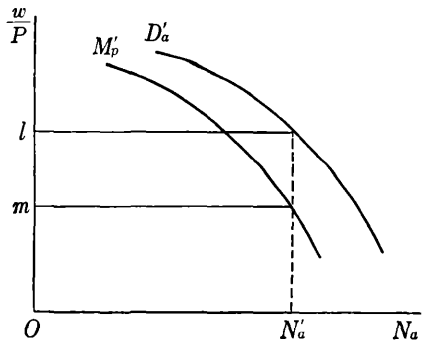


図 3

ここで，農業労働者は，⑩の効用関数を前提して，

㋑　$U_a<U_u$

なら，農村から都市に移動することができるが，

㋺　$U_a>U_u$

でも，都市労働力が農村に移動することはできない。

なぜならば，「大都市は労働者と使用者との家父長的関係を，あとかたもなく破壊しつくしてしま」[20]うのに対して，農村の雇用に家父長的要素が残ることと，共有地の存在を伴なうような共同体的関係の残存は，都市の「よそ者」の農村への移動を困難とするからである。

したがって，そこでは，

㋩　$U_a \geqq U_u$

となるが，そのもとでは，農業労働者は，借地農業者が提示する，所与の農業労働力数に応じて D'_a に沿った，農業製品のタームで計った賃金率に，そのときの農業製品の価格を乗じた賃金率で労働するとしよう。

農村の労働力人口が N'_a であるなら，その限りでは農業賃金率は l に農業製品の価格を乗じたものになる。それが㋩を成立させるなら，農業賃金率は変化しない。㋑を成立させるなら，農村から都市への労働力移動がおこり，農業労働者数は N'_a から減少するから，農業製品のタームで計った賃金率は l から上昇し，また，農業製品の価格も上昇するから，農業賃金率は上昇する。このとき，都市の工場の雇用量と賃金率は都市で独立に決定されるから，農村からの労働力の流入は都市の失業率を上昇させ，都市の労働力の期待効用を低下させることを通じて，

㋥　$U_a=U_u$　（……⑪）

を成立させるのである。

さて，ここで，以上について，二点を整理しておこう。

まず，この体系が均衡するとき，その均衡は安定であることを改めて確認しておこう。

すなわち，

$$\frac{d\dot{N}_u}{dN_u}<0$$

なら均衡は安定であるが，

$$dN_u=-dN_a$$

を考りょすると，

$$\frac{dU_u}{dN_u}=-\frac{N_f U_f}{(N_u)^2}<0$$

$$\frac{dU_a}{dN_u}=U'(\cdot)\Big[-P\gamma g''(\gamma N_a)-\frac{\partial P}{\partial Y_a}g'(N_a)g'(\gamma N_a)\Big]>0$$

注（20）　Engels, [2] pp. 155-156, 上. p. 236.

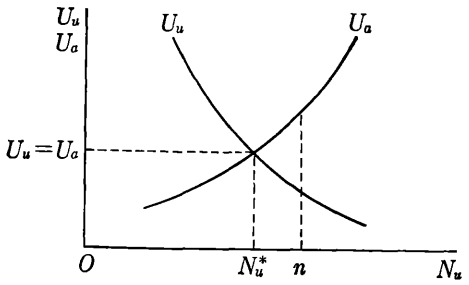


図 4

$$\frac{d\dot{N}_u}{dN_u}=\phi'(\cdot)\left[\frac{dU_u}{dN_u}-\frac{dU_a}{dN_u}\right]<0$$

となるのである。

また，計算上の均衡点で，

$$N_a>\bar{N}_r$$

であれば，それは，都市から農村へ労働力移動が行なわれれば体系は均衡するが，都市から農村への労働力移動は不可能であるという前提があるため，均衡が達成されない状態が存在することを示している。

それは，都市労働力人口が均衡点より大，すなわち図4のnのような位置にあることを意味している。したがって，そこでは，㋺が成立することになるのである。

（3）

ところで，以上のような体系から，借地農業者が自らの行動を変化させ，雇用における家父長的原理を消失させ，利潤最大化原理に純粋に従うようになり，また，それと平行して共有地の存在を含む共同体的関係も最終的に解体されるとしてみよう。この点が，本稿で整理したエンゲルスの展開の主要な論点である。

借地農業者の労働需要曲線が図3の D'_a から M'_p そのものに変化するなら，その限りでは農業製品のタームで計った農業賃金率はmの水準に低下するが，これもその限りでは，農業製品の価格は変化しない。そうした賃金率の低下が大幅なものであり，賃金率を生存賃金に近いものとするなら，農業労働者は労働の最低供給価格をもたない不完全就業状態においこまれることになるであろう。(21)

ここで，賃金率の低下と共同体的関係の最終的解体によっても，㋺が成立するなら，今度は都市から農村への労働力移動が行なわれることになる。(22) 農村への労働力移動を妨げる要因が消失するからである。

逆に，賃金率の低下と共同体的関係の解体によって，㋑が成立するなら，農村から都市への労働力移動が行なわれる。

いずれにせよ，農業製品のタームで計った農業賃金率の変動方向と農業製品の価格の変動方向は同一であるから，㋩が成立することになるのである。

さて，ここでも，以上のような変化について整理しておこう。

農村の雇用において家父長的原理が消失し，共同体的関係も最終的に解体することは，先の体系で，

$$r=1$$
$$C=0$$

になることで示される。そうした変化がおきれば，農村の労働力は，労働の最低供給価格をもたない不完全就業状態におちこみうるし，また，都市から農村への労働力移動を困難にしていた要因もなくなるから，

$$N_a\leqq\bar{N}_r$$

の制約もなくなる。

そうすると，体系はハリス＝タダロの労働力移動モデルに事実上ほぼ等しくなる。(23) 1項でみ

注（21） 不完全就業については，島田，〔9〕第4章参照。

（22） 19世紀のイギリスにおいて，収穫時のような農繁期には，農業日雇賃金が上昇し，都市労働者が農村にいってしまうため，工場が労働力不足で一時閉鎖されることがあった。Morgan, 〔6〕, Kumar, 〔7〕pp. 154-163, 参照。

（23） Harris and Todaro, 〔3〕参照。

た体系は，ハリス＝タダロの体系に示される状態にイギリス的な特性をもって歴史的に先行する状態を示すものだったのである。

そうした変化そのものにおいては，

$$\frac{dN_a}{d\gamma}=-\frac{U'(\cdot)[PN_a g''(\gamma N_a)]}{\frac{dU_a}{dN_u}-\frac{dU_a}{dN_u}}<0$$

$$\frac{dN_a}{dC}=-\frac{1}{\frac{dU_u}{dN_u}-\frac{dU_a}{dN_u}}>0$$

であるから，

$$\frac{dU_a}{d\gamma}<0$$

$$\frac{dU_a}{dC}>0$$

となる。家父長的な雇用原理が消失し，共同体的関係が消失すれば，農業労働者の効用水準は低下し，したがって，それと均衡する都市における労働力の期待効用も低下するのである。すなわち，家父長的雇用原理と共同体的関係の残存のもとでも，均衡は都市における失業を含むのであるが，それらの消失の過程では，都市の失業率は増大するのである。また，前者のもとで均衡が成立していなくても，後者のもとでの均衡に移行するとき，農業労働者の効用水準は低下するのである。[24]

(四) おわりに

産業革命期とその後の労働者の「窮乏化」論の理論的妥当性については様々に論じられてきた。

そうした「妥当論」と「否定論」の対立の中で，ここで提示したエンゲルスの把握が前者の原型をなすことはいうまでもない。

その特質は，

1) 都市の工場で雇用される労働者の賃金と生活水準は「まずまず」のものでありうるにもかかわらず，それは大量の失業者の存在と共存しうる点，

2) 農村の労働者の生活水準が，家父長的関係や共同体的関係の最終的解体によって低下しうるし，それが都市の失業に影響を及ぼしうる点，

を明らかにしていることにあった。[25]

また，本稿で捨象した都市の労働力の所得と生活水準の多様な階層性も，都市におけるさまざまの労働によって，それに必要な労働者の文明度・適応度が異なるものと考えれば説明可能であろう。

もちろん，このように整理した把握が現実と適合的であったか否かはおのずと別の問題である。しかし，それが窮乏化論的産業革命理解のための一つの仮説を提示していることは疑いないのである。

その場合，エンゲルスは，イギリスの労働者階級がそうした貧窮をぬけ出しうることには否定的であった。『状態』におけるエンゲルスは，後のマルクスのようには，資本蓄積の過程での労働節約効果について悲観的ではなかった。先の引用（引用（11），（14））からも示唆されるように，農村における労働力需要は停滞ないし減少すると考えていたが，都市におけるそれは，資本蓄積に従って増大すると考えていたのである。[26] しかし，エンゲルスは，「イングランドの，またことにアイルランドの『過剰人口』は，イングランド工業にたいして，たとえそれが二倍の規模に達してさえも，必要な数の労働者を供給するのに十分」[27]であり「工業にあたえられた最初の刺激は，人口増加の速度をはやめる」[28]であろうと考えたのである。

注（24） 新たな均衡が安定であることの計算による説明は，ibid., pp. 138-139，参照。

（25） Hartwell and Engerman, 〔4〕参照。

（26） エンゲルスが都市において注目したのは，むしろ，そこでの「変動的貧窮」すなわち，景気循環による過剰人口の吸引と反発であった。

（27） Engels, 〔2〕p. 315，下．p. 219.

（28） ibid., p. 315，下．p. 219.

たとえ，都市の工場部門の労働力需要が順調に増大しても，都市と農村の労働力の自然増殖がそれを上回るなら，「過剰人口」は増大するし，前者が後者を上回っても，すでに産業革命期に大量に滞積した「過剰人口」を吸収しつくすには，極めて長い時間がかかりうるであろう。(29) ……もちろん，こうした事情は，エンゲルスの期待した体制的変化はもたらさなかった。

何よりも，アメリカ合衆国の発展が，大量のアイルランド移民を吸収したのである。しかし，その過程で，飢饉と移民により，アイルランドの人口は，1841年の約818万人から，世紀の転換点である1901年の約456万人へと，劇的な減少をこうむることにもなるのである。

引用文献

〔1〕 Basu, K. *The Less Developed Economy,* Blackwell, 1984.

〔2〕 Engels, F. *The Condition of the Working-Class in England,* 以下に所収，*Marx Engels on Britain,* Lawrence and Wishart, 1954, 邦訳，一條和生・杉山忠平訳，『イギリスにおける労働者階級の状態』，岩波文庫，1990.

〔3〕 Harris, J. R. and M. P. Todaro, "Migration, Unemployment and Development: A Two-Sector Analysis," *American Economic Review,* Vol. LX, No. 1, 1970.

〔4〕 Hartwell, R. M. and S. Engerman, "Models of Immiseration: The Theoretical Basis of Pessimism," 以下に所収，Taylor, A. J. ed., *The Standard of Living in Britain in the Industrial Revolution,* Methuen, 1975.

〔5〕 Mirrlees, J. A. "A Pure Theory of Underdeveloped Economies," 以下に所収，Reynolds, L. G. ed., *Agriculture in Development Theory,* Yale University Press, 1975.

〔6〕 Morgan, D. H. "The Place of Harvesters in Nineteenth-Century Village Life," 以下に所収，Samulel, R. ed., *Village Life and Labour,* Routledge and Kegan Paul, 1975.

〔7〕 Kumar, K. "From Work to Employment and Unemployment: The English Experince," 以下に所収，Pahl, R. E. ed., *On Work,* Blakwell, 1988.

〔8〕 Ranis, G. and J. C. H. Fei, "A Theory of Economic Development," *American Economic Review,* Vol. LI, No. 4, 1961.

〔9〕 島田晴男，『労働経済学』，岩波書店，1986.

〔10〕 鳥居泰彦，『経済発展理論』，東洋経済新報社，1979.

（経済学部助教授）

注 (29) Ranis and Fei, 〔8〕, 鳥居, 〔10〕, 第7章参照。

農村における労働需要曲線が時間を通じて不変であるとしても，都市の工場部門における労働力需要の増大が，都市と農村の労働力人口の自然増殖を上回るなら，都市の過剰人口は吸収されていき，また，都市の労働力の期待効用は上昇するから，農村の労働力は都市に移動し，農業賃金率も上昇する。

こうした過程がつづくなら，農村の労働力は，いつか労働の最低供給価格を形成する可能性をもつであろう。しかし，以上の過程で，農工間の製品の交換比率が，工場部門にとって悪化することは，その進行を妨げるかもしれない。